学 位 論 文 内 容 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	諸井　彩子【論文博士】 【国際日本学専攻　平成17年度生】 （平成26年3月31日　単位修得退学）	本論文は、平安時代に最盛期を迎えた、内裏・後宮・内親王家等の女房たちの文学活動について、その歴史的実態と、彼女たちの生み出した文学作品そのものについて考察したものである。全体は序章・終章を除き全三章十三節から成る。 摂関期の女房たちについては多くの研究が重ねられているが、研究史における本論文の新しさは次のようにまとめられる。 ①女房たちの呼称と職掌の原則を実証的に明らかにすることで、従来の研究の曖昧であった点、人物同定の誤りなどを指摘し、より確かな研究の基盤を整備していること。 ②そうした知見を基にして、この時期の物語作品に現れる女房たちの呼称から、その人物の性格付けを読み取る方法の有効性について具体的に証明していること（以上：第一章）。 ③女房たちが主家の「サロン」（ヨーロッパの社交界で用いられる用語を平安時代に援用したもの）において行った、集団としての文化活動につき、女主人の役割や女房の中での役割分担について具体例から明らかにし、「サロン」のより実態に即した包括的記述を提案していること。 ④「サロン」が和歌のみならず物語・歴史物語などの生産に関わっていたこと、次世代へ向けての人材育成の機能を持つことなどについて新しい見解を示していること（以上：第二章）。 ⑤以上のような議論を基にした実践研究として、従来疑問の多かった女房歌人三人について、経歴や事績の詳細を明らかにしたこと（以上：第三章）。 本論文の特徴は、十世紀～十一世紀の女房たちに関する広範な調査と独自の観点設定により、従来の研究よりも客観的・包括的な記述に到達したこと、また男性作家とは異なる社会的存在形態や集団創作というあり方を、個々の集団の記述を超えて全体的に明らかにしたことにある。和歌・物語・日記文学・歴史物語・宮廷社会史・有職故実など複数のジャンルの先行研究に対する目配りを有していることも高く評価される。
論 文 題 目	摂関期女房と文学	
審 査 委 員	（主査）　教授　浅田　徹	
	准教授　松岡　智之	
	教授　古瀬　奈津子	
	教授　荻原　千鶴	
	日本女子大学教授　高野　晴代	